

春

第12期 中原 裕人

春。私が一番大好きな季節。暖かな陽気と和やかな風に包まれながら、私たち人間は今までの環境に別れを告げ、新たな世界へと一步を踏み出していく。この名状しがたいワクワク感とか、ドキドキ感とか、湧き出る熱量とか、そういうもの全てを引っくるめて、私は春という季節が大好きだし、この季節の虜になった。

2年前、20度目の春。期待に胸を躍らせ、私は小野晃典研究会に入会した。この春からの1年は、というと、とにかくハードであった。まず、入会当初から迫り来る課題の山、山、山。山を越えたと思いきや、次に立ちほだかるのは、終わりの見えないグループワーク。さらに、一息つく間も与えないと言わんばかりに襲いかかってくる入ゼミ活動。この文章だけ読むと、「なんだ、君は小野ゼミが嫌だったのか？」なんて聞かれてしまいそうだが、実はそんなことは全くない。むしろ心地よさすら感じていた。「たくさんエグって、大きく成長したい！」という確固たる意志（世間ではドMとも言う）を心に宿して入会した中原少年にとって、積み重なるタスクはむしろ熱い思いを加速させるための燃料みたいなものであったからだ。そして、自分で言うのはおこがましいところもあるが、現に成長することもできた。今2年前の自分に一言述べることができるならば、小野ゼミに入会するという英断を下した自分をひたすら褒めるであろう。

1年前、21度目の春。頼りにしていた先輩たちと別れ、そして、目を輝かせた可愛い後輩たちに出会う。この春は、いつもとは少し違う春になった。例年通りならば、私はすかさず「自分が期待に胸が躍るかどうか」という主観的な考えばかりをしていたことであろう。しかし、この春、「他人が期待に胸が躍るかどうか」という客観的な考えを初めて持った。具体的に述べると、自分が小野ゼミに入会したいと思うきっかけになったかっこいい先輩像に、自分も近づくことができたのか、ということである。今まで考えることのなかった新しい観点から物事を考えるようになった自分にふと気づき、スキルや知識面以外にも私を成長させてくれた小野ゼミには本当に頭が上がらないな、とそんなことを思ったのであった。

そして、ついに22度目の春がやってくる。2年間という短い時間であったはずなのに、今までのどんな経験より濃度の高すぎた小野ゼミ、そして、学生生活と別れを告げるときだ。もしかすると、社会人というマンネリ化した環境の中で長年を過ごしていくと、小野ゼミに入会したときのような熱い思いを持つような春や、新しい発見をするような春は少なくなるのかもしれない。しかし、私が大好きな春を無為に過ごしてしまいそうになっているときは、高い目標を掲げた20度目の春や、新たな気づきを得た21度目の春のような最高の春について綴った、このエッセイが私をあるべき方向に導いてくれるであろう、とそんな希望的観測をしながら、筆を置くことにしよう。